



ア
メ
リ
カ
童
話
か
ら
4

松原至大

#### 4 きたない犬ラッグス

小さな馬車がとまつて、毛むくじやらのぼろ（ラッグス）のような子犬が、道に投げ出されました。飼い主のおじさんが、ぶんぶんおこつていました。

「もう、あのスリツパが、かじりじまいだよ。」こう言つて、急いで歸つてしまいました。

ラッグスは悲しそうに道ばたで、馬車の見えなくなるのを見送つていました。

「そうかしら。でも、おじさんは戸だなの中に、いつばいスリツパを持つているんだよ。——ぼく、いけないことをしたのかなあ？」と、ラッグスは考えました。

その道は廣くて、なんにも眼につくものがありませんでした。ラッグスはこわくなりました。子犬はなにができません。ラッグスは、どこかにお家を見つけないければなりません。

こう思うと、ラッグスは急におとなになつたような気がしました。もう、スリツパなどはかじらないにしようと思つて、歩道によじあがりましました。するといつの間にか、悲しさが消えていきました。

「きつと、よいお家を見つけるぞ。」ラッグスは、一軒一軒お家を見ながら、歩道を歩きました。あるお家の前の芝生で、おばさんがお花に水をかけていました。ラッグスは、ていねいに寄つて行つて、

「わん、わん。」と尾をふりました。

すると、そのおばさんは振りかえつて、

「まあ、きたない、ぼろみたいな犬。お家の芝から、はなれてちようだい。」と言いました。そして、さんぶと水をかきました。

ラッグスは、逃げ出しました。びしょぬれになつて、よろよろしながら、道を歩きました。疲れて、もう走る事ができなかつたのです。

しばらく行くと、一人のおじいさんが、きれいなお家の玄関のところで、ゆりいすに掛けていました。このおじいさんなら、お家においてくれるだろうと思ひました。そつとはいあがつて、尾をふりました。

おじいさんは眼鏡めがねごしに見て、

「よし、よし。」と言いました。

ラッグスは、顔をあげて、

「わん、わん。」と言いました。これは、犬の言葉で「お宿やどがほしいのです。」と言うのでした。

ラッグスは、おじいさんのいすの腕うで木の上に、猫がいるのに気がつきませんでした。猫はラッグスを見ると、背中をまるくして、顔を目がけてとびかかりました。

「ぎあーつ。」と、猫はなきました。その爪つめはするどくて、痛いのです。「ここは、わたしのお家よ。あつちへおいで」と言つたのでしよう。

「きやん、きやん、きやん。」とラッグスは泣きながら、逃げ出しました。どんどん走りましました。そしてきたところは前よりも小さなお家が、ぼつんぼつんと建つてるところでした。そのあき地に、箱がいくつかありました。ラッグスは、その一つにもぐりこんで眠つてしまいました。

この箱は、ゲリー君という少年が、一生懸命に作つたおもちゃのお家でした。その一すみに、疲れたラッグスが、ぐつぐつと寝こんだのです。

「おや、子犬がいるよ。」と、ゲリー君が言いました。

ラッグスは、その聲に眼をさまして、

「わん、わん。」と言いました。ゲリー君は、その意味がわかつて、

「お前、ぼくといつしよにいたいのだね。そうだろう？」とたずねました。

ラッグスは、「わん、わん。」と答えました。「そうです、そうです。」と言うのでした。

ゲリー君は、ラッグスをだきました。

「ずいぶんぼろぼろで、きたないんだな。ぼろみたいだからラッグス（ぼろ）という名がいいよ。」と、少年は言いました。

そこで、ラッグスは「わん」と言ひました。これは「ぼく、賛成。」というのです。

「おばあさん、おばあさん、すばらしいことが、おこりましたよ。ラッグスが、ぼくたちといつしよに暮すんですつて。」こう言いながら、ゲリー君は、うれしさのあまり、お臺所<sup>だいどころ</sup>にかけこみました。

おばあさんは、皮をむいていたおいもを、思わず落しました。おいもは、ころがりました。「おや、まあ。どこで見つけたの？」

「ぼくのおもちやのお家で。」

「わたし、こんなきたない犬は、見たことがありませんよ。」

「でも、利口ですよ。おばあさん、あんなに尾をふつている。」

ほんとうにラッグスは、尾をふつていました。しきりにふつていました。その中にラッグスは、よいことを思ひつきました。かけて行つて、おいもをくわえて、おばあさんのところへ持つて行きました。

「おばあさん、ごらん。お手傳いしますよ。」と、ゲリー君が大きな聲で言ひました。

ラッグスは、じつと立つていました。その茶色の眼は、お願いするように、じつとおばあさんの顔にむけられています。

おばあさんは、ラッグスを追いかえすことができなくなりました。でも、やつとのことで作る自分たちの食事を、へらすことはできません。まい子の犬を養うことは、とてもできないと思つたのでした。

「あしたまで、ここにおいでやりましょう。あしたになつたら、どこかへやらなければなりませんよ。」おばあさんがこういいました。

それでもラッグスは幸福でした。おばあさんは、ミルクをくれたのです。「ありがとう」の代りに、「わん、わん。」と言つて、ラッグスは、うれしそうにそれを飲みました。

夜になりました。おばあさんは、お臺所の床の上に、古い枕をおきました。ラッグスは、まるまつて眠りました。おばあさんとゲリー君も眠りました。

不意にラッグスが、眼をさました。くんくん、鼻をならしています。なんだか妙なおい、がするのです。ばちばち、音がします。煙突に近い壁のところ、あかるくなっています。これはいけない。「わん、わん、わん。」と、ラッグスははげしくほえました。

おばあさんがとび起きて、臺所にかけてけました。ストーヴに残しておいた火が、外にこぼれたのでした。すぐに消しとめました。ほつておけば、火事になるところでしたね。おばあさんは、きたない子犬をだきあげて、「お前は、お家を救つたのだよ。もうすつと、わたしたちといつしよにいておくれ。」と、やさしくいきました。

おばあさんは、自分のベッドにもどりませんでした。ラッグスを膝の上にのせて、臺所の窓のそばに腰をおろしました。もう、夜明けなのでした。おばあさんは、雲の色がピンクから金色にかわるのを見ていました。お家が無事であつたことを、とてもうれしく思つたのでした。

しばらくすると、ゲリー君が起きました。ラッグスも起き出しました。おばあさんは、ゲリー君に夜のできごととラッグスが勇敢であつたことを、ゲリー君にお話ししました。

「そういうわけで、この犬を追いだすことはできませんよ。どうして食べさせたらよいのか、わたしにはわからないけれど。」

ゲリー君には、一つの考えがうかびました。

「ラッグス、おいで。散歩をしよう。」

ラッグスは、ゲリー君といつしよにとび出しました。ふたりは、肉やさんがちようどお店を開いたばかりのマーケットへ行つたのです。

「なにかお仕事はありませんか？ ほく、ほくの犬にやるお肉をかせきたいのですけれど。」

肉やさんは、ゲリー君のまじめな顔を見て、につこり笑いました。

「よろしい。君は毎朝、お店を掃除しておくれ。」

ゲリー君は喜んでお店を早速きれいに掃除しました。すると肉やのおじさんは、肉をいくらか包んで、ゲリー君にわたしました。

「それから、ダイム（アメリカのお金。一ドルの十分の一、十セント銀貨のことです。）を一枚あげよう。よく働いて

くれましたね。」

「ありがとう、おじさん。」お禮をいうゲリー君は、あまりのうれしさに、聲がよくでません。

飛ぶようにして歸つてきたゲリー君は、やさしい肉やおじさんのことを、おばあさんに細かに報告して、

「ぼく、毎朝、働けるんですよ。」と、言いました。

ラッグスは、うれしそうに新しいお家の中を、かきまわりました——おいすのまわりを、カーテンの下を。寢室には、一足のスリッパがありました。ラッグスはそれをくわえて、お臺所へ持つて行つて、おばあさんの足のところにおきました。そして二度とスリッパは、かじろうとしませんでした。(ミナーヴァ・マクソン女史の作による)

### 第四回 關西連合 保育會 研究協議會

#### 一、プログラム

日時 昭和二十五年十月二十一日(土曜日)

九時集合 九時半開會 受付登録(八時より開始)

會場 名古屋市榮小學校 名古屋市中區中ノ町  
道順 市電 南園町停留場下車 約五分

#### 大會順序

一 開會式 (九、三〇—一〇、一〇)

3 1 祝奏 辭榮 4 2 挨拶 彰 摺

二 議事 (一〇、一〇—一〇、四〇)

3 1 報 告 2 會則變更の件  
建 議 案

休憩 (一〇分)

#### 三 研究發表

畫 食 (一〇、五〇—一一、一〇)

四 分團研究協議 (一一、一〇—一一、三〇)

3 1 保育理論 2 保育の實際  
組 織 經 營

休憩 (二〇分)

五 實踐計畫の報告 (一一、三〇—一一、五〇)

六 分團報告 (一一、五〇—一二、一〇)

七 閉會式 (一二、一〇—一二、三〇)

3 1 閉會の挨拶 2 次回開催地挨拶  
保 育 歌

#### 二 加盟保育團體

京都保育連盟 大阪保育會 兵庫保育會 岡山  
縣保育會 奈良縣幼稚園會 三重縣保育連盟  
和歌山縣保育事業協會 滋賀縣保育研究會 名  
古屋市幼児教育會